

特集 ■ リハビリテーション関連職種の現状と展望

ここでは、各筆者が論文で一番強調したい点をまとめていただいた。

医師（江藤文夫氏，533 頁）：リハ科専門医には臓器別診療を担う医師とは異なる専門性が求められ、同時に、日本リハ医学会の核として一般医家に対するリハ医療の知識と技術の普及にも努める必要がある。

看護師（落合美美子氏ら，537 頁）：障害を有する患者・家族が、安心して暮らせるように看護・支援するのがリハ看護の役割である。そのためにもリハの専門的知識・技術を備えたエキスパートナースの育成が望まれる。

理学療法士（中屋久長氏，540 頁）：急増する養成校には教育水準の確保と適切な評価，増加する理学療法士には職域・業務拡大が大命題である。そのために，社会要請に応える学術研究，EBPT に基づく技術と人間性教育，品格ある社会貢献の専門職の構築が必要である。

作業療法士（杉原素子氏，545 頁）：医療と福祉の各サービス領域に同じくらいの人数の作業療法士を配置し，障害をもつ人たちが高齢の方たちを，医療施設から各々の居宅生活につなげるお手伝いをしたい。

言語聴覚士（深浦順一氏，548 頁）：言語聴覚士の数は急速に増えたが，まだまだ不足している。若い言語聴覚士の急速な増加は，質の高い言語聴覚療法の提供のために資質向上のための取り組みを強く要求している。

心理士（平林 一氏ら，551 頁）：リハ分野では，高次脳機能障害支援モデル事業における臨床心理士の実績が評価され，この領域における心理士の役割に対する認識が関係者にも浸透してきた。

義肢装具士（栗山明彦氏，555 頁）：義肢装具士の国家資格がスタートし約 20 年経過した。この間の義肢装具士の社会的身分や立場の変化，業務における問題点など，将来に向けて課題は多い。

エンジニア（田中 理氏，557 頁）：リハ工学は障害者が豊かな人生を送るための重要な支援技術であり，今後，リハエンジニアを公的に認知された職種として位置づけていく必要がある。

ソーシャルワーカー（笹岡眞弓氏，560 頁）：（医療）ソーシャルワーカー＝社会福祉士（&精神保健福祉士）が現在の姿で，これは国際基準にも準じている。活躍する領域は拡大傾向にあるが，研修の充実が今後の課題である。

精神保健福祉士（小関清之氏，563 頁）：精神保健福祉士は，社会福祉学を基盤に，精神疾病・障害構造に関する専門知識を踏まえ，個と全体の相互作用に着目した「人権と社会復帰とリハ技術の三位一体のリハ」を担っている。

スポーツ指導者（大槻洋也氏，566 頁）：スポーツ活動において，指導者は欠かせない存在である。競技スポーツ，生涯スポーツ，リハとしてのスポーツなど，目的に合った指導者が必要とされている。

障害者職業カウンセラー（西村公子氏，569 頁）：障害者職業カウンセラーは，障害者の円滑な就職，職場適応を図るために，医療・保健，福祉，教育，雇用・労働などの各関係機関と連携し，障害者・事業主双方に対して専門的な職業リハサービスを提供している。